有朋自遠方来

前号の本欄では、日本美術研究の主　なテーマに取り組む外国人のお話をいたしました。大和文華館へのお客様を御紹介するこの欄ではこれまで多くの外国からのお客様に御登場願いましたが、そうした方々の中には、もう何度目かの来日で、研究を通して大和文華館の長年の友となっている方も沢山いらっしゃいます。今日のテーマはその中の一人、西ドイツのベッチーナ・ガイガー・クライン女史です。

ハイデルベルグ大学の東洋美術史研究所研究員であり、国際交流基金長期招聘者として今回、何度目かの来日をしていられます。研究テーマは狩野永徳。目下、博士論文を準備中で、狩野派の作品を求めて、各地の美術館やコレクターを訪ねておいでです。狩野派の作品は当館にも何点かあり、皆様にも御紹介済みですが、近頃は、狩野探幽の縮図を丹念に撮影して行かれました。日本人にも難しい永徳の研究成果がどのように表われるか楽しみです。

ハイデルベルグ大学からの訪問者はいずれも、同大学を昨年退官されたドイツにおける東洋学の第一人者ディートリッヒ・ゼッケル教授の教え子たちです。クラインさんの他には、ゼッケル教授の後を継いで同大学における東洋学講座の第二代目の教授となられたローター・レダローゼさん（中国絵画）や、アルムブラスター女史（大和絵）、ブリンカー氏（仏教美術）などが見えられ、本欄でも御紹介済みですが、クライン女史はそうした方々の後輩に当ります。伝統あるドイツの東洋学の専門家として、彼女が、幾度かの来日の成果をどのように発表され、後輩の指導にあたられるかは私達に大いに興味のあるところです。

（写真中央がクライン女史）

季刊 美のたより No.42
昭和53年 4月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.